

近代日本民俗学史の構築について／覚書

佐藤健二

Construction of History of Folklore Studies in Modern Japan

SATO Kenji

はじめに

- ① 近代日本民俗学史構築の意義
- ② 日本民俗学史の再点検と地方民俗学史
- ③ 「年表」という技法の功罪
- ④ 郷土での民俗学史のために：主体と場の交錯をたどる
- ⑤ 再び、民俗学における「歴史」とは何か

【論文要旨】

本稿は近代日本における「民俗学史」を構築するための基礎作業である。学史の構築は、それ自身が「比較」の実践であり、その学問の現在のありようを相対化して再考し、いわば「総体化」ともいえるべき立場を模索する契機となる。先行するいくつかの学史記述の歴史認識を対象に、雑誌を含む「刊行物・著作物」や、研究団体への注目が、理念的・実証的のどのようによびえられてきたかを批判的に検討し、「柳田国男中心主義」からの脱却を掲げる試みにおいてもまた、地方雑誌の果たした固有の役割がじつは軽視され、抽象的な「日本民俗学史」に止められてきた事実を明らかにする。そこから、近代日本のそれぞれの地域における、いわゆる「民俗学」「郷土研究」「郷土教育」の受容や成長のしかたの違いという主題を取り出す。糸魚川の郷土研究の歴史は、相馬御風のような文学者の関与を改めて考察すべき論点として加え、また「青木重孝著作集」（現在「五冊刊行」）のような、地方で活躍した民俗学者のテキスト共有の地道で貴重な試みもつ可能性

を浮かびあがらせる。また、澤田四郎作を中心とした「大阪民俗談話会」の活動記録は、「場としての民俗学」の分析が、近代日本の民俗学史の研究において必要であることを暗示する。民俗学に対する複数の興味関心が交錯し、多様な特質をもつ研究主体が交流した「場」の分析はまた、理論史としての学史とは異なる、方法史・実践史としての学史認識の重要性という理論的課題をも開くだろう。最後に、歴史記述の一般的な技術としての「年表」の功罪の自覚から、柳田と同時代の歴史家でもあったマルク・プロックの「起源の問題」をとりあげて、安易な「比較民俗学」への同調のもつ危うさとともに、探索・博搜・蓄積につとめる「博物学」的なアプローチと相補いあう、変数としてのカテゴリーの構成を追究する「代数学」的なアプローチが、民俗学史の研究において求められているという現状認識を掲げる。

【キーワード】 地方民俗学史、総体化、場としての民俗学、理論史と実践史、歴史認識